

氏名・(本籍地)	柴田 康 順 (愛知県)
学位の種類	博士(人間学)
学位記の番号	甲第96号
学位授与の日付	平成26年3月15日
学位論文題目	青年の自己確立 —日本的アイデンティティの理論的構築—
論文審査委員	主査 森 岡 由起子 副査 飯 長 喜一郎 副査 廣 川 進

## 柴田康順氏 学位請求論文審査報告書

### 「青年の自己確立—日本的アイデンティティの理論的構築—」

#### 論文の内容の要旨

第一章ではこれまでのアイデンティティ研究について概観し、問題点を整理した上で求められる研究について述べた。アイデンティティ研究は日本において数多く行われてきたが、研究者ごとに定義が異なっていたり、アイデンティティの状態を類型化するアイデンティティ・ステイタス・モデルによる検討が行われてきたことで、アイデンティティの本質的な部分が見落とされてしまっているという問題があった。近年、特に日本の杉村(1998)らによって、自己と他者の関係のあり方がアイデンティティであり、それによってアイデンティティの形成は進んでゆくのではないかという指摘がなされるようになった。

それらの背景を踏まえ、本論文は、青年のアイデンティティ形成に i) 母親、ii) 父親、iii) きょうだい、iv) 同性の友人、v) 異性の友人・恋人との関係がどのように関連しているのかという点について、質問紙法(『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入』の3つの下位尺度の得点に

よりアイデンティティ・ステイタスを評価する同一性地位判別尺度)、半構造化による面接法、投影法(TAT、SCTなど)を用い、量的及び質的な調査を行い、アイデンティティ形成のプロセスと様相を踏まえた理論モデルを生成することを目的として行われた。

第二章では本論文における調査方法について述べた。調査対象者は縁故法によって抽出された20代の青年10名であった。調査は4回にわたって行われ、期間は2010年10月から2012年3月までのおよそ2年半を要した。調査内容はまず質問紙により調査対象者のアイデンティティ・ステイタスを評定し、上記の5領域の小規模集団との関係性について半構造化面接により調査対象者のこれまでの対人関係について回想的にふり返り、投映法を実施するというものであった。

第三章では母子関係、父子関係が青年のアイデンティティに対して与える影響についての調査結果がまとめられた。質問紙によるアイデンティティ・ステイタス分類の結果2名が高位の、8名が低位のアイデンティティ・ステイタスに分類された。TATの結果、高位のアイデンティティ・ステイタスの人は登場する人物に様々な役割を演じさせていたのに対して低位のアイデンティティ・ステイタスの人は登場する人物に自分を投影しすぎるあまり、TAT物語を対象化して捉えることができていなかった。面接による結果からは母親や父親の特性の取り入れは無意識的に行われることや、母親、父親との直接的な交渉によって以外にも家族成員それぞれが持つ母親、父親のイメージを総合して間接的に取り入れられることが推察された。両親はそれぞれ異なる側面で青年に影響を与えており、母親は日常的な感覚について、父親は規範性などの社会的な側面について影響を与えていた。また、母親イメージが優柔不断であるか、決定力があるかといった点でアイデンティティの状態は異なり、前者は低位のアイデンティティ・ステイタスと関連し、後者は高位のアイデンティティ・ステイタスと関連していた。さらに、両親がそれぞれの親とどのような関係を持っているか、両親がこれまでどのような人生を歩んできたかといった両親のアイデンティティを自身のアイデンティティの拠り所と感じられることも青年のアイデンティティ形成においては不可欠であるということが述べられた。

第四章ではきょうだい関係が青年のアイデンティティに対して与える影響についての調査結果がまとめられた。質問紙の結果、4名が高位の、6名が低位のアイデンティティ・ステータスに分類された。きょうだい関係が青年のアイデンティティに影響を与えていることは推測されつつも、きょうだい個人との関係がアイデンティティに関連しているということではなく、両親との関係をベースにした上にきょうだいとの関係が成立していることが非常に大きな意味を持っている可能性があるとして述べられた。青年は家族の中での自分の役割や立場に対して疑問を感じながら、家族以外との人間関係も含めて自分の担うべき役割を模索することできょうだい関係は対等のものに近づいていく。きょうだいとの関係を対等だと思うためには、きょうだいに対して持つ劣等感や引け目などの負の感情を処理する必要があり、アイデンティティの確立と関連しているのはこのような感情を処理した上で自分をきょうだいの中、ひいては家族の中に適切に位置づけられることではないかと考えられた。青年のアイデンティティ形成において両親のかかわりや態度、姿勢を見ながら他のきょうだいとの間で自分や担うべき役割を試行錯誤しつつ、家族の中での自己定位を行うことが重要と考えられた。

第五章では同性の友人関係が青年のアイデンティティに与える影響についての調査結果がまとめられた。質問紙の結果3名が高位の、7名が低位のアイデンティティ・ステータスに分類された。同性の友人関係は社会で生活する上で必要な環境としての要素と、様々な価値観に触れる機会として対人関係としての要素を併せ持つことが見出された。同性の友人関係の中での重要な体験は自分の思う自分と他者から見た自分が異なることに直面することであり、この両者をすり合わせる作業に成功していることが後のアイデンティティ確立に大きな影響を与えると述べられた。この作業に失敗すると対人関係において不安が付きまとうことになり、他者に対して親密な関係性を築くことが困難となり、結果的に自分のことも他者のことも理解できなくなると考えられた。特にアイデンティティが拡散すると、他者とかかわること自体がストレスとなるため、他者との親密な関係について想像することもできず、環境としての友人関係以上の親密な関係を回避するようになることが推察された。また SCT ではアイデンティティの状態によって文章の内容が異なっ

ており、アイデンティティが拡散に近い人ほど、他者との関係性や時間的な連続性、ひいては自分の在り方に確信が持てずにいたことが特徴的であった。

第六章では異性の友人関係や恋愛関係が青年のアイデンティティに与える影響についての調査結果がまとめられた。質問紙の結果2名が高位の、8名が低位のアイデンティティ・ステータスに分類された。面接の結果からは、異性の友人関係と恋愛関係のいずれも青年のアイデンティティの状態と明確に関連していないように思われた。異性の友人関係に関しては相手に同一化したり、相手の特徴を取り入れたりする過程は生じにくく、対人関係一般の文脈の中で語られる友人と同様に捉えられていた。恋愛関係についての語りの内容に注目するとアイデンティティ・ステータスから推測される関係性とは不整合なものが見られたことから、職業に代表されるような「個」としてのアイデンティティと他者との「関係性」から見たアイデンティティは異なる次元で発達し、アイデンティティ・ステータスは特に前者を反映したものであり、目の前の青年の姿とは異なるものとなる可能性があるとして述べられた。

第七章では4回の調査結果を縦断的に分類し、個別のデータとしてまとめた結果として以下のことが述べられた。両親との関係を基盤として親子関係の中で自己定位を行い、きょうだい関係においては両親との関係を含めた家族の中で自己定位が行われることで、関係性の核となる居場所感が形成される。そして、家族との関係を永続的な関係性の核となる居場所と感じられることで、対人関係において相互交流をする際に信頼できる関係を構築することができると思われた。異性の友人関係は対人的距離の取り方によって異性愛的な関係と友人関係は区別されるものであった。恋愛関係は家族関係のような居場所感を期待される点で他の人間関係とは異なり、家族関係とは相互交流の程度が大きいという点で異なると述べられた。

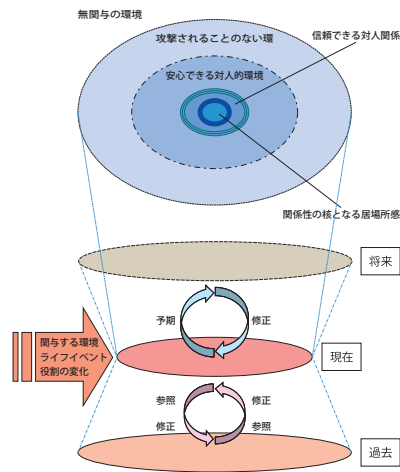
以上の結果を踏まえて関係性と時間性の連関を基にした理論モデルが構築され、過去を参照したり将来を予期したりしながら現在の自分の在り方を修正しながら外力によって不安定になった現在の自分を関係性の中に再定位するプロセスがアイデンティティ形成のプロセスであり、現在の自分の状態がアイデンティティの様相であると考えられた。また、参照される過去や将来の自己の在り方は一次元的な時間軸上に存在するわけではなく、異なる領域の自己が参

照されるため、ある領域での自己定位の状態が総体としての自己の在り方に波及することが推測された。

第八章では論文全体のまとめが行われ、これまでのアイデンティティ研究で求められてきた量的研究と質的研究の折衷を試みたことで青年の生き生きとした姿を描き出すことができ、特にこれまで研究の蓄積が少なかった父子関係やきょうだい関係、異性の友人関係といった領域についての有益な知見が得られた。また「個」と「関係性」のアイデンティティを異なる2軸で考えるのではなく、互いに関連しながら発達するという視点を持つ必要があると述べられた。特に「関係性」から見たアイデンティティは単に他者との対人関係という1次元的なものではなく、現在の関係性の中での安定した自己定位が何らかの要因の影響で動揺したときにでも、さまざまな領域における過去の自己の在り方を参照したり、将来を予期したりすることで再び適切な自己定位を行うことができるという時間性を帯びているものであることを視覚的に示したことに本論文の意義があると述べられた。

### 審査結果の要旨

本研究は、日本の青年におけるアイデンティティ形成についての理論を構築するための、基礎的研究としてデザインされた。これまでの心理学領域ではアイデンティティについては膨大な研究があるが、アイデンティティという言葉自体があまりにも多様な意味を含んだ概念になっていた。また、この領域の研究は残念ながら、Erikson (1946) から始まる「発達段階説」・「青年期のアイデンティティ拡散」など、輸入紹介された概念を日本にあてはめて論証するという研究が多かった。これに対して、近年本邦を中心に「アイデンティティ形成は、自己の視点に基づき、他者の視点を内在化すると同時



に、そこで生じる両者の視点間の食い違いを相互調整することによって解決するプロセスである」(杉村、1998)という、自己と他者の関係のあり方こそアイデンティティであるという指摘がされるようになった。そこで柴田氏は、青年が自分を形成するにあたり、両親・きょうだい・同性の友人・異性の友人などの小集団関係がアイデンティティ形成に及ぼす影響を面接法と、質問紙および投影用で分析しようとした。

まず、「ある青年がメソジストであり、共和党の農夫である父親のように、ほとんど何の疑問も感ずることなく、メソジストで共和党の農夫になっているならば、本当にアイデンティティを達成しているのだろうか」ということに疑問をもった Marcia (1964) が開発した、それまでの「達成—拡散」理論でない、「危機」と「自己投入」の2基準から分類されるアイデンティティ・ステータスの経時的変化を4回にわたり評価している。得られた知見は、面接の回が進むことでアイデンティティが達成に向かうわけではなく、また3分類されたステータスは、両親・兄弟・同性の友人・異性の友人との関係の特性とある程度の関連は認められたものの整合性に欠けるものであった。

審査においては、本研究が、アイデンティティ・ステータスという枠組み評価からスタートしたため、4回にわたる貴重な長時間にわたる「語り」を十分に咀嚼されているとは言いがたく、今後は投影法であるTATなどの変化を含めた、面接から得た継続した分析が必要という指摘があった。また、質問紙で評価されたステータスと投影法での評価が一致していないことの検討も今後なされる必要がある。その点も含め、TAT、SCT以外の使用した評価 tool の吟味について再考されたい。さらに、内容要旨では触れられていないが、3回目の面接は東日本大震災3ヶ月後ということもあり、対象者のアイデンティティ・ステータスの『現在の自己投入』と『将来への自己投入』が低下したように、アイデンティティは他者との関係性だけでなく、状況などによっても大きく変化することから、面接内容だけではなく、被面接者の背景状況を考慮した、経時的なアイデンティティ形成プロセス、ひるがえれば Erikson が指摘しているアイデンティティにおける「時間性」についての検討も必要と思われる。

以上のような、今後検討されるべき課題はあるが、本研究は本邦の青年期

のアイデンティティ形成の理論的構築を行うための、重要な基礎研究となるものであり、アイデンティティ形成プロセスにおける自己と他者との関係について重層的な考察をおこなっている。また、最後に提起された「関係性の中の自分が自覚されている時の関係性と時間性の関連」(アイデンティティが拡散している場合には「関係性の中に自分が自覚できない……」)のシエマは、今後のアイデンティティ研究に一つの視座の提案をしている点で、新知見となるものであろう。さらに、本論の中では十分に展開されなかったが、シエマのなかで異なる領域の自己が参照され修正されるプロセスと、自己が定位されるあり方に、関係性の核となる「居場所感」(Eriksonの基本的信頼と安全感)の存在が大きく影響していることの指摘も、今後取り組むべき研究課題を提起している。

本研究は、大正大学大学院の博士後期課程論文にふさわしいものとする。

なお、研究は十分な倫理的配慮の元に実施されてはいるが、発表にあたっては個人の匿名性がたもたれることの上での研究協力同意がなされており、発表に際しては慎重な配慮が求められることを申し添えたい。